

## 留学生との合同調査から

相 田 潤

(北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座予防歯科学分野・国立保健医療科学院専門課程)

深井先生

この3月に大学を卒業し、国立保健医療科学院で学び始め、先生に再会出来るとは思ってもおりませんでした。学生時代に、JAICOHの国際歯科保健の報告会でお話をおうかがいして以来です。近況をご報告させていただきます。

科学院では、公衆衛生全般を、様々な職種の方とともに学ばせていただいています。その中で、数名でチームを組み調査研究を行なう実習があります。私は、アフリカ人留学生6人と日本人学生3人のチームに所属しました。

互いに協力し合い一つのものを作り上げていく。異文化への戸惑い、反発、議論、緩やかなだが確実な理解、そして信頼。形作られていくチームワーク、言葉の壁を越えた友情という名の絆。そんな物語を国際交流に描いていました。

実際はその様な生易しいものではありませんでした。開始直後の笑顔は束の間、すぐに現れた意見の相違、そして衝突。相手がまったく理解出来ずに不信感ばかりが溜まっていきました。ストレスのせいか、一ヶ月以上にわたる実習期間には原因不明の蕁麻疹が全身に出たこともありました。果てには「アフリカには絶対に行かない」という決心に至りました。

ある日、つい最近怒鳴りあいの喧嘩をした相手

のワープロ打ちを手伝うことになりました。彼はパソコンが苦手で、それを放っておくとチームの仕事が進みません。仕方なく、そして年上の彼に言いすぎたという後ろめたさもあってのことです。打ち込みの仕事が終わった時に、実習が始まって以来消えていた彼の笑顔を久しぶりに見ました。突然のことに戸惑いが隠せないまま、ぎこちなく何とか私も笑うことが出来ました。

この後にも当然の様にトラブルは続きました。しかし何となしに彼らが憎めなくなっている自分がありました。その一方では、言いたいことを少しは主張出来る様になってもしました。

昨日実習は終わりましたが、今はぼんやりと考えています。アフリカに行ってみようかと。

思い描いていた国際協力のイメージも、美しく論理的な疫学・統計の実現も今回敗れました。おそらく、授業で習ったヘルスプロモーションや行動変容も、打ち立てた理論やモデルの実現も、私のイメージ通りには行かないのでしょう。簡単に実現できることであればどこでも実現されているのだと思います。

アフリカに行ってみようかと思えた気持ちを、今後出会うであろう様々な場面で持っていければと思います。